第14回 読響メトロポリタン・シリーズ 【 ○ 〈金〉東京芸術劇場コンサートホール/19時開演

The 14th Yomikyo Metropolitan Series Friday, 6th February, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

第579回 サントリーホール名曲シリーズ 〈十〉サントリーホール/14時開演

指揮 広上淳一 4~-> Conductor JUNICHI HIROKAMI

ヴァイオリン ボリス・ベルキン 6ページ Violin BORIS BELKIN

コンサートマスター 小森谷巧

Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ハチャトゥリアン 組曲〈仮面舞踏会〉から"ワルツ" [約4分] 7<-->

KHACHATURIAN / Waltz from "Masquerade"

ショスタコーヴィチ ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調作品77 [約39分] 8ページ

SHOSTAKOVICH / Violin Concerto No. 1 in A minor, op. 77

I . Nocturne: Moderato II . Scherzo: Allegro

III. Passacaglia: Andante IV. Burlesque: Allegro con brio

[休憩 Intermission]

ショスタコーヴィチ **交響曲 第5番** 二短調 作品47 [約44分]

SHOSTAKOVICH / Symphony No. 5 in D minor, op. 47

I. Moderato – Allegro non troppo II. Allegretto III. Largo IV. Allegro non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 「助成〕 ★文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業) (2/7) [事業提携] 東京芸術劇場 (2/6)

演奏をお楽しみいただくために



演奏中にプログラムをご覧になる際には、 ページをめくる音にご注意ください。 チラシの入った袋などは膝上に乗せず、 足元に置いておくことをお勧めします。



写真撮影・録画・録音はご遠慮ください。



"咳エチケット"にご協力ください。 ハンカチでお口元を押さえるなど、 周囲へのご配慮をお願いいたします。



携帯電話の電源をお切りください。 時計のアラームや鈴のついたキーホルダーなどは、 音が出ないようご注意ください。



「ブラボー | や拍手は、タクトが降ろされてから。 消えゆく余韻は生演奏の醍醐味です。 その貴重な瞬間を、ぜひご堪能ください。

7 13 第545回 定期演奏云 (金) サントリーホール/19時開演

2.15 第174回東京芸術劇場マチネーシリーズ (日)東京芸術劇場コンサートホール/14時開演

The 174th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series

指揮 シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) 5ページ Conductor SYLVAIN CAMBRELING (Principal Conductor)

ヴィオラ ニルス・メンケマイヤー 6ページ

Viola NILS MÖNKEMEYER

コンサートマスター 日下紗矢子 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

武満徹 鳥は星形の庭に降りる [約13分]

10ページ

TORU TAKEMITSU / A Flock Descends into the Pentagonal Garden

バルトーク ヴィオラ協奏曲 (シェルイ版) [約21分]

11ページ

BARTÓK / Viola Concerto (Serly version)

I. Moderato II. Adagio religioso III. Allegro vivace

「休憩 Intermission

アイヴズ 答えのない質問 [約6分]

12ページ

IVES / The Unanswered Question

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 *短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] 13~2

DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

I . Adagio – Allegro molto II . Largo III . Molto vivace IV . Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (2/13)

[助成] ※文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)

[協力] アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社) (2/13)、 AIRFRANCE ✓ エールフランス航空

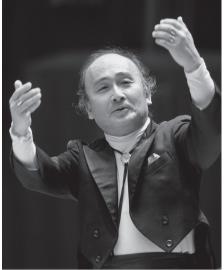
[事業提携]東京芸術劇場(2/15)

芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレコンサート

2月15日(日)の《第174回 東京芸術劇場マチネーシリーズ》では、開演前の13:30か ら、「芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサー トホールで開催します。詳細は14ページをご覧ください。

大胆かつ情熱的な音楽作り内外の聴衆を魅了する名匠

広上淳一 Junichi Hirokami



の詩郷(塩影・書柳聡)

◇ 2月6日 読響メトロポリタン・シリーズ ◇ 2月7日 サントリーホール名曲シリーズ

1958年東京生まれ。東京音楽大学指揮科に学び、84年に開催された第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールで優勝し、国際的な活動を開始。その後フランス国立管、ベルリン放送響、ロイヤル・コンセルトへボウ管、モントリオール響、イスラエル・フィル、ロンドン響、ウィーン響など、世界的なオーケストラへの客演を重ね、ノールショピング響(スウェーデン)首席指揮者、リンブルク響(ドイツ)首席指揮者、ロイヤル・リヴァプール・フィル首席客演指揮者、コロンバス響(米国)音楽監督を歴任。近年では、ヴァンクーヴァー響、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、サンクトペテルブルク・フィル、ボルティモア響、シンシナティ響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ポーランド放送響などに客演している。

国内では91年から2000年まで日本フィルの正指揮者を務め、07年にはサイトウ・キネン・オーケストラ、また08年には水戸室内管を指揮し、聴衆および批評家からともに絶賛された。読響とは86年以降、数多く共演を重ね、現在は京都市響第12代常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザーを務めている。

オペラの指揮でもシドニー歌劇場におけるヴェルディの〈仮面舞踏会〉や〈リゴレット〉が高く評価されたのをはじめ、近年では藤原歌劇団〈椿姫〉、日生劇場〈フィガロの結婚〉、新国立劇場〈椿姫〉、〈アイーダ〉等が記憶に新しい。読響とは昨年11月に日生劇場で〈アイナダマール〉(作曲:オスヴァルド・ゴリホフ)の日本初演に取り組み、各方面から絶賛を博した。

若手指揮者の育成にも情熱を注いでおり、東京音楽大学指揮科教授、京都市立芸術大学客員教授として後進の指導にあたっている。

常任指揮者就任5年目 満を持して欧州公演へ

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)

Maestro

of the month

今月のマエスト

Sylvain Cambreling (Principal Conductor)





◎読纂

幅広いレパートリーを縦横に組み合わせた絶妙な選曲と、色彩感あふれる緻密な演奏で圧倒的な評価を確立している読響の第9代常任指揮者(2010年4月就任)。今月指揮するプログラムと、昨年12月に指揮した酒井健治/ブルーコンチェルトとメシアン/トゥーランガリラ交響曲の2プログラムを携え、3月には読響にとって12年ぶりの欧州公演を実現する。(欧州公演の詳細は20ページをご参照ください)

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在は世界有数のオペラ・ハウスであるシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を務めているほか、世界の最先端を行く現代音楽アンサンブルであるクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者も兼任している。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、02年からドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招聘教授を務めている。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流 楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、SWR響などとの多数のCDのほか、読響ともこれまでに《幻想交響曲ほか》《ペトルーシュカほか》《第九》をリリース。昨年12月には、最新盤《春の祭典/中国の不思議な役人》《スコットランドほか》の2タイトルが発売された。

巨匠たちからの信頼も厚い 実力派ヴァイオリニスト

ボリス・ベルキン Violin Boris Belkin

1948年ロシア生まれ。7歳でキリル・コンドラシンとの共演でデビューし、神童として注目を浴びた。73年、ソヴィエト連邦ヴァイオリンコンクール優勝。74年の西欧への移住以後、国際的な活躍を展開し、ベルリン・フ



ィル、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、ロイヤル・コンセルトへボウ管、フランス国立管、イスラエル・フィルなどに招かれ、バーンスタイン、マゼール、ザンデルリンク、テミルカーノフら巨匠たちとの共演を重ねてきた。バシュメットやマイスキーとの室内楽でも活動し、DeccaやDENONレーベルなどからCDも多数リリースしている。

使用楽器は1754年製のG.B.ガダニーニ。読響とは80年と2010年に共演しており、今回が3回目の登場となる。

◇2月6日 読響メトロポリタン・シリーズ ◇2月7日 サントリーホール名曲シリーズ

ドイツでめきめき頭角を現すヴィオラ界のニュースター

ニルス・メンケマイヤー Viola Nils Mönkemeyer

1978年、ドイツ・ブレーメン生まれ。ミュンヘン音楽・ 演劇大学で学び、若手ヴィオラ奏者の登竜門である ORF国際ヴィオラ・コンクールやドイツ音楽コンクール などで優勝。フリューベック・デ・ブルゴス、ミハイル・



©Irene Zandel

ユロフスキ、ホグウッド、マイスターらの指揮でベルリン放送響、ドレスデン・フィル、ウィーン放送響など名だたるオーケストラと共演している。近年はユリア・フィッシャーらとの室内楽活動にも積極的に取り組むほか、母校ミュンヘン音楽・演劇大学の教授も務めている。

ソニー・クラシカルから多数のCDをリリースしており、いずれも絶賛を博している。使用楽器はミュンヘンのペーター・エルベン作。

読響とは今回が初共演。3月の欧州公演にもソリストとして出演する。

◇2月13日 定期演奏会 ◇2月15日 東京芸術劇場マチネーシリーズ

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

敗尾洋一

第14回 読響メトロポリタン・シリーズ

2.6_金

第579回 サントリーホール名曲シリーズ

2.7 (±)

ハチャトゥリアン 組曲〈仮面舞踏会〉から"ワルツ"

作曲:1941年(劇音楽)、1944年(組曲)/初演:1941年、モスクワ(劇音楽)/演奏時間:約4分

舞踏会を彩る華麗で重厚なワルツが、悲劇的結末を予感させる

アラム・ハチャトゥリアン (1903~78) はトビリシに生まれ、ソ連で活躍したアルメニア人作曲家。少年期には正規の音楽教育に恵まれなかったものの、多民族が共生する故郷で幼少時から親しんだ豊かな民俗音楽を背景として、独自の音楽的感性が育まれた。

〈仮面舞踏会〉はレールモントフの戯曲への劇音楽として作曲された。舞台となるのはロシアの貴族社会。主人公は美しい妻ニーナと仮面舞踏会に出かける。舞踏会でニーナはうっかり自分のブレスレットを落としてしまう。これを拾った婦人が、しつこく言い寄る公爵に、自分のものと偽ってブレスレットを渡す。公爵がそのブレスレットを、口説いた女からもらったと主人公に見せびらかしたこと

から、主人公はニーナが不貞を働いていると誤解する。主人公は舞踏会でアイスクリームに毒を盛って妻を死に至らせる。この劇音楽から、のちにハチャトゥリアンは5曲を選んで組曲に仕立てている。なかでも"ワルツ"はたびたび独立して演奏される人気曲。華やかで重厚なオーケストレーションによって甘美で頽廃した舞踏会のひとときを表現しながら、悲劇的なムードを漂わせてニーナの不条理な死を予告する。BGMとして耳にする機会も多く、フィギュアスケートでも浅田真央選手をはじめとして数多くの使用例がある。

ハチャトゥリアンは晩年まで自作の指揮者として世界各地を訪れた。1963年には来日して読響を指揮している。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、小太鼓)、弦五部

ショスタコーヴィチ ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調 作品77

作曲:1947~48年/初演:1955年、レニングラード/演奏時間:約39分

ジダーノフ批判の陰で書かれ、スターリン死後に日の目を見た野心作

第二次世界大戦の終結後に訪れた冷戦 の時代は、ソ連の芸術家たちにも大きな 影響を及ぼすことになった。1948年、 スターリンを含む党中央委員会政治局の メンバーは、グルジアの作曲家ムラデー リのオペラ〈大いなる友情〉を観るため に、ボリショイ劇場を訪れた。スターリ ンは作品内容に激怒し、教育人民委員ジ ダーノフはすぐさま関係者を集め、作品 が歴史的事実を歪曲していることを批 判する。さらにジダーノフは、ドミトリ $-\cdot$ ショスタコーヴィチ (1906~75) をはじめとする多数の音楽家たちが「形 式主義的堕落と音楽の反民主的傾向をも っとも顕著に表している」として、「無 調性、不協和音、騒音への礼賛」を非難 し、彼らの作品の演奏を禁じた。

12年前の〈ムツェンスク郡のマクベス 夫人〉に続いて、ふたたび形式主義批判に さらされたショスタコーヴィチは「私は 形式主義の方向へ逸脱し、人民に理解で きない言葉でしゃべっていた。批判に深 く感謝する」と、自己批判を強いられる ことになる。教職という仕事も失ったシ

ョスタコーヴィチは、表向きは党の要請 に従ったオラトリオ〈森の歌〉等のプロパ ガンダ的な作品を発表しながら、一方で この大規模で野心的なヴァイオリン協奏 曲第1番など、自らの芸術的な欲求に従 った作品を書いた。ただしこれらはさら なる批判を避けるために公表を見送られ ることになる。1953年にスターリンが急 浙すると、未発表作品が相次いで初演さ れるようになり、ヴァイオリン協奏曲第 1番もようやく1955年にダヴィッド・オ イストラフの独奏によって初演された。

第1楽章 ノクターン、モデラート 協 奏的な対話というよりは、独奏ヴァイオ リンによる暗鬱で長大なモノローグ。

第2楽章 スケルツォ、アレグロ 哄笑 と皮肉のなかで、めまぐるしく表情を交 替させる。

第3楽章 パッサカリア、アンダンテ 荘重な主題に切々とした変奏が続く。最 後に大規模なカデンツァが置かれる。

第4楽章 ブルレスケ、アレグロ・コン・ ブリオ エネルギッシュで激烈なフィナ ーレを迎える。

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(バ スクラリネット持替)、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、チューバ、ティンパニ、 打楽器 (タンブリン、シロフォン、タムタム)、ハープ2、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ショスタコーヴィチ 交響曲 第5番 二短調作品47

作曲:1937年/初演:1937年、レニングラード/演奏時間:約44分

プラウダ批判から作曲者を救った、今なお議論を呼ぶ成功作

ヴァイオリン協奏曲第1番が「ジダー ノフ批判」に前後して書かれた作品であ るのに対し、交響曲第5番はその12年 前に起きた「プラウダ批判」に対する作 曲家の回答といえるだろう。

オペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫 人〉によって名声の絶頂にあったショス タコーヴィチだが、1936年、スターリン がこのオペラを観た直後、ソ連共産党機 関紙プラウダに「音楽ではなく荒唐無稽 ――ムツェンスク郡のマクベス夫人につ いて」と題された無署名の論評が掲載さ れた。記事は作品を「粗野で原始的で下 品」と批判し、ショスタコーヴィチのみな らずソヴィエト音楽界全体のモダニズム 的傾向に対して厳しく警告を発した。プ ラウダ批判は甚大な影響を及ぼし、ショ スタコーヴィチの作品は演奏会から姿を 消す。ショスタコーヴィチは新作の交響 曲第4番を完成したが、リハーサルの段 階で作品の撤回を余儀なくされてしまう。 こうした情勢のなかで、ショスタコー ヴィチは続く交響曲第5番を作曲した。

作品はソヴィエト連邦作曲家同盟の予備

審査を経たのち、当時新准気鋭の指揮者 ムラヴィンスキーによって初演された。 初演はセンセーショナルな成功を収め、 聴衆の興奮を呼び起こすと同時に、体制 側からも社会主義リアリズムの理念にの っとった偉大な作品とみなされ、「正当 な批判に対するソヴィエト芸術家の創造 的返答」と評価されることになった。

ただし、この作品に込められた作曲者 の真意に対しては、さまざまな議論があ る。果たして、終楽章の輝かしい高揚は、 精神的葛藤の超克だろうか。あるいは、 そこにアイロニーやパロディの匂いを嗅 ぎとるべきなのだろうか。

第1楽章 モデラート~アレグロ・ノン・ トロッポ 厳粛な冒頭主題で開始され る。軍楽調の行進曲と冒頭主題の変形が 交錯して緊迫感あふれる頂点を作る。

第2楽章 アレグレット スケルツォ楽 章。中間部はレントラー風のワルツ。

第3楽章 ラルゴ 痛切な祈りの音楽。 第4楽章 アレグロ・ノン・トロッポ 衝き動かされるように壮絶なコーダへと 驀進する。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファ ゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トラ イアングル、小太鼓、シロフォン、グロッケンシュピール、タムタム)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

広瀬大介

ひろせだいすけ・音楽学、音楽評論

第545回 定期演奏会 2.13 (金)

第174回東京芸術劇場マチネーシリーズ 2.15 (日)

武満徹 鳥は星形の庭に降りる

作曲:1977年/初演:1977年11月30日、サンフランシスコ/演奏時間:約13分

「前衛」と「伝統」の間をつないだ、作曲家の新境地

この不思議な題名の作品を作曲するきっかけについては、やはり武満徹(1930~96)自身の言葉以上に雄弁に語るものはないだろう。いわく、現代芸術作家マルセル・デュシャンの髪を星形に剃った写真を見た作曲家が、この写真に触発されるように、五角形の庭に鳥の群れが舞い降りる、という夢を見たという(実際に武満がその様子をスケッチした絵が遺されている)。

オーボエによって演奏される鳥の群れをあらわす動機は、嬰ヘ音 (F #) という中心音をもつ五音音階によって構成される。この鳥たちが、弦楽器を主体とする「五角形」の地へと降りていく。全体で15分に満たない音楽は(作曲家の言葉によれば)13の部分に分けられており、楽譜にもAからM

まで13か所に練習番号が振られている。 次々と異なる場面が連続していくこの音 楽を、西洋的な楽曲形式にあてはめなが ら聴こうとすることはやや難しいだろう。

1977年、サンフランシスコでの初演時には、その和声・管弦楽法において、アルバン・ベルクとの親近性が指摘された。また、五音音階を使う点で、武満が前衛的な手法を駆使する作曲家であることを止め、やや中道的な路線へと方向転換した、という評もある。欧米において日本人作曲家の代表とされた武満徹の評価は、前衛的な音楽からエリート主義を取り払い、伝統的な語法と現代音楽の書法を調和させた、と評されたこの作品を通じて、より確かなものとなった。

楽器編成/フルート3(ピッコロ、アルトフルート持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(エスクラリネット、バスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、打楽器(大太鼓、サスペンデッド・シンバル、チューブラーベル、マリンバ、ヴィブラフォン、カウベル、タムタム、ゴング)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

バルトーク ヴィオラ協奏曲 (シェルイ版)

作曲:1945年、シェルイによる補筆:1949年/初演:1949年2月2日、ミネソタ大学/演奏時間:約21分

遠く離れた故郷をアメリカから思いやる、作曲家の絶筆

ベラ・バルトーク (1881~1945) は、 祖国ハンガリーの右傾化を嫌い、1940 年にアメリカ・コロンビア大学の客員研 究員として移住を果たした。1943年に 体調を崩すが、バルトーク一家の経済的 苦境を見かねた友人たちが、指揮者クー セヴィツキーなどに働きかけ、新作を委 嘱する。これがきっかけとなり、驚異的 なスピードで作曲されるに至ったこの後 の管弦楽作品は、すべて協奏曲と名付け られた。バルトーク自身、大衆にとって よりわかりやすい作品を生み出そうと志 したとも言われるが、同時期に作曲され た〈無伴奏ヴァイオリン・ソナタ〉などは、 そのような思い込みを拒絶する厳しさに 満ちてもいる。

ヴィオラ奏者、ウィリアム・プリムローズがバルトークに委嘱したヴィオラ協奏曲は、1945年9月の段階では順調に作曲が進んでいたが、同月、白血病によって作曲家は急逝。補筆を任された弟子のティボール・シェルイは、そのスケッチを前に、筆致の解読に苦しめられつつも、完成へとこぎつけた。なお、本作は、

後に息子ペーター・バルトークによって 新たな版が作成され、読売日本交響楽団 でも、2012年7月、清水直子の独奏で この新版が演奏されているが、今回はシェルイ版での演奏となる。

すべての楽章は切れ目なく演奏され、 先行楽童には次の楽童の内容を予告する ような楽想が織り込まれる。第1楽章(モ デラート・発想記号はシェルイによる) は純粋なソナタ形式に拠っており、三つ の主題が提示されつつ、独奏楽器として の超絶技巧とうまく折り合いをつけてい る。緻密に作り込まれたこの楽章に比べ ると、あとの二つの楽章は、バルトーク が本来意図した長さよりもはるかに短い のでは、という印象を与える。第2楽章 の発想記号「アダージョ・レリジョーソ (宗教的に)」をシェルイはピアノ協奏曲 第3番の緩徐楽章と同一にした。三部形 式による急速な中間部と終結部はかなり 短い。第3楽章(アレグロ・ヴィヴァー チェ)では、民俗舞曲を思わせる数々の 魅力的な旋律が、明快なロンド形式によ ってつなぎ合わされる。

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット3、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、小太鼓)、弦五部、独奏ヴィオラ

アイヴズ 答えのない質問

作曲:1908年、1930~1935年に改訂/初演:1946年5月11日、ニューヨーク/演奏時間:約6分

多彩な書法が共存する時代に向けた、深遠な「問い」

西洋音楽史において、チャールズ・アイヴズ(1874~1954)は、その位置づけと評価がもっとも難しい作曲家のひとりである。アイヴズ&マイリック保険会社の創業者・副社長として、会社を繁栄へと導いた名うての実業家であり、作曲はあくまでも「余技」として位置づけていた。だが、西欧の作曲家の誰よりも早く、あらゆる現代的な音楽書法を試していることは驚嘆に値し、いまでは20世紀における前衛音楽の祖とされている。初演は第二次世界大戦後の1946年に行われたが、アイヴズ自身は風邪のために臨席できなかったという。

20世紀という時代は、多調や無調など、さまざまな音楽書法が同時期に存在する、音楽史上においても珍しい時代となった。アイヴズは独特の嗅覚で、そのような状況を〈答えのない質問〉という謎めいた作品で示している。作曲家自身の言葉では、この曲には次のような説明が与えられている(筆者抄訳)。「……僧たちが沈黙する中、トランペットによる『問い』が投げかけられ、人間たちの探求はより活発で騒がしくなる。『努力によっ

て得られる答え』は、やがて無益さを自 覚し、問いそのものをからかう。最後の 『問い』、そして沈黙が、乱されることの ない孤独のなかで、彼方から聞こえる」

ト長調の、調性的な書法による弦楽器

に重ねられ、トランペットが「問い」を 発する。この「問い」は、1908年の初稿 では変口音(Bb)に始まり、同じ音へ と戻っていたが、後年の改訂の最終段階 で、この最後の音がハ音(C)や口音(B) に変えられ、より不安定感が増した。こ れに応える木管楽器が「問い」に対する 「答え」ということになるのだろうが、こ の音の連なりには非調性的な音型が意図 的に選ばれ、弦楽器と鋭い対照を成す。 フルートの四重奏は回を重ねるごとに 徐々に興奮の度合いを深め、6回目では ほとんど意味を成さない狂騒状態へと陥 る。間いそのものを否定しかねないほど の混乱を呈した後で、最後にもう一度、 7回目のトランペットが鳴り響き、聴き 手にふたたび「問い」を投げかける。本 当に、これがわれわれの望む「音楽」の ありようなのか、と。その後には、穏や かな弦楽器の静寂のみが残る。

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 **短調 作品95 〈新世界から〉

作曲:1893年/初演:1893年12月16日、ニューヨーク、カーネギーホール/演奏時間:約40分

「新世界」にたたずむ作曲家による、アメリカとボヘミアの架け橋

1892年からニューヨークのナショナル 音楽院の院長を3年間務めたアントニン・ ドヴォルザーク (1841~1904)。この作 曲家が滞米中に手がけた作品の中では、い まなお、もっとも高い知名度を誇っている。 この作品で用いられた主題の多くは、アメ リカ、あるいはボヘミアの民謡から採られ たものだと論じられる。ドヴォルザーク自 身、アメリカでそうした民謡を採取したこ とを認めてはいるものの、それは「自分の 個人的なものであり、自分が携えているの はチェコの音楽である」と、謎めいた言葉 を遺している。引用をそのまま使ったの ではなく、アメリカという土地に生きる ボヘミア人としての心象風景を作品の中 に投影しようとしたことの現れなのか。

このことは、四つの楽章すべてに音楽的な統一感を与える「循環主題」の手法を用いることで示された。第1楽章(アダージョ~アレグロ・モルト)の序奏後に提示されるホルンの主題がそれである。このあとも、ト短調による内向的なフルートとオーボエの旋律、ト長調による伸びやかなフルートの旋律が相次いで

登場し、ソナタ形式として作られているこの楽章に複雑さを与えている。"家路"の旋律を含むことで有名な**第2楽章**(ラルゴ)は、第1楽章のホ短調に対して、もっとも遠い変ニ長調が選ばれており、アメリカとボヘミアの距離的・心理的なへだたりをあらわしているようだ。

躍動的なスケルツォ・第3楽章(モルト・ヴィヴァーチェ)においても、その終結部において循環主題が顔をのぞかせる。冒頭部分、ホルンとトランペットによる主題が大変有名な第4楽章(アレグロ・コン・フオーコ)では、それまでの楽章のモティーフが次々と登場し、単なるソナタ形式には収まらない斬新な工夫を見せている。

後年、ウィーンでこの作品が演奏された際、ドヴォルザークを世に送り出したブラームスは、その旋律の魅力を称賛しつつ「素晴らしい着想の数々がちりばめられているが、大きな交響曲としての形を成していない」と評している。一方で、評論家エドゥアルト・ハンスリックはこの最終楽章を「もっとも統一され、効果的」と激賞した。

楽器編成/フルート4、トランペット、弦五部

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、弦五部